

オアシス21 ライラック棟

症例概要 利用者 : 80代 男性 要介護4

利用期間: 2025年12月 ~ 現在

病名: 認知症、高血圧、慢性腎臓病、腹部大動脈瘤、胆石、器質化肺炎、胃癌術後、左大腿骨骨折術後、右腎摘出後

経過: ご自宅にて独居されており、娘夫婦が裏に住み、ご本人を支援していた。デイサービスに週3回通っていたが、『仕事がない。やることがない。行きたくない。』ということが増え始める。プライドが高く、スタッフを振り払って自宅に戻る恐れが高くなり、レスパイト・特養待機目的で入所の相談がある。令和7年12月下旬に入所に至る。

内 容

令和7年12月に入所された氏は、非常にプライドが高く、入浴や諸活動に対して強い拒否感を示されていました。帰宅願望も強く、周囲との接触を拒む「構わないでくれ」という姿勢から、職員との信頼関係の構築は難航していました。しかし、職員は粘り強くコミュニケーションを継続。氏が日課としていた廊下歩行を「継続していて素晴らしい」と肯定し、日常的に声かけを続けることで、少しずつ備品の片付けなどの軽作業を手伝っていただけようになりました。

大きな転機となったのは、2月の雪像作り企画に伴う「雪はね」の依頼でした。長年の生活習慣であった作業に対し、氏は「やってやる」と自発的な意欲を見せ、当日は職員に技術的なアドバイスを送りながら生き生きと作業に従事されました。

続いて、元大工職人の経歴に着目し、ナースステーションの整理棚の作成を依頼しました。氏は設計段階から前向きに関わり、職員から「師匠」と慕われ協力して作業を進めた結果、4月に見事な棚を完成させました。事務部門も転倒防止対策を講じるなど、施設全体でこの活動をバックアップしました。

この一連の活動により、看護職員から感謝の言葉が寄せられたことで、氏の表情には入所当初には見られなかった笑顔が定着し、職員との対話も大幅に増加しました。

本事例は、本人の自尊心を尊重し、これまでの人生で培った技術や経験を「役割」として提供することが、生活意欲の向上とその人らしさの回復に不可欠であることを示しています。介護・看護・リハビリ・事務がチーム一丸となって取り組んだことが、成功の鍵となりました。今後も、ご利用者が自身の強みを活かし、輝きのある一日を過ごせるよう、個別のニーズに寄り添った支援を継続して行ければと思います。

【介護・看護・リハビリ】事前に身体状況やバイタルを確認し、安全に実施できるよう三者連携

【看護】ステーションの物品を整理したいという現場の困りごとを提示し、氏の活動のきっかけを作り

【管理職】棚作成にあたり、構造や手順について専門的な視点からアドバイス

【事務】完成した棚の設置時に、転倒防止対策を実施し環境整備

大工職人」という経歴をあえて「師匠」と呼び、教えを請う形をとることで、氏がプライドを保ちながら主体的に動ける雰囲気作り